

## 論文審査結果の要旨

平成31年2月20日（水）午後1時から午後2時50分まで、文学部会議室において公開審査会が開かれ、本論文についての概要の発表と、論文内容についての質疑応答が行われた。そこで検討された主な論点は以下のようなものであった。

- 1 懐風藻を対象とする研究の意義について
- 2 詩語研究の独自性について
- 3 白話語彙を検証する課題について
- 4 懐風藻の「人物伝」と誄や墓誌銘との関わりについて
- 5 序文と書名考証の課題について
- 6 編纂意図の解明への見通しについて

- 1 現在の懐風藻研究において、通説化している多くの論点を見直し、詩と文のすべてを読み直した上で、新たな観点からの検証を進めていくつも埋もれていた論点を見出した意義は大きい。当時の日本人が漢籍をどのように学んだかという実態も不分明な状況において、新たな研究の可能性を示したものである。本論文ではまだ懐風藻の検証に留まっているが、その漢籍受容全般の研究や他の上代文学全般の研究にも大きな影響を与えることが予想され、今後も視野の広い研究の展開が期待される。
- 2 詩語の研究における独自の規定である「用例未見語」の定義は、斬新な観点としての意義が大きい。しかし、その詩語が懐風藻における詩作で参照可能な漢籍において「未見」なのか、後世にわたっても「未見」なのか不分明であり、意図は頷けるがなお用語の定義は慎重にすべきであった。また「用例未見語」にも稀少ながら用例があること、また懐風藻における使用状況（詩人別、主題別など）によるさらなる精査の必要性も指摘された。本論文の主張する積極的な漢字使用による「未見語」は「新たな詩語」でもあるが、それをを用いることの実態の分析については、なお考究の余地が残されている。
- 3 当時の白話語彙の受容は、懐風藻のみならず上代文学において重要な課題である。口語を書記した文章語である白話の語彙への注目をを行い、「未見語」使用との関連性を検証しようとする方向は評価される。ただその検証には、漢魏六朝期から唐代にかけての当時の中国語の書記文のあり方、また当時の日本人が従来からの詩語と白話語彙をどのように弁別しえたかを常に想定しておくことが求められる。また故事の短縮語という視点も注目されるが、漢籍にも視野を広げた、当時の造語意識も想定しておくべきであろう。
- 4 人物伝と誄や墓誌銘との関わりについては、なお多くの課題が残る。不遇な者への再評価という側面も含めて、それぞれとの関連性は認められるが、日本と中国での誄の実態にも多様な側面があり、人物伝とまずは別に検証した上での考証を進めることが求められる。また人物伝の付されている人物のうち僧侶については、本論文で検証されている

『藤氏家伝』や『延暦僧録』に留まらず、高僧伝などの検証も当然必要である。重要な参看資料である「唐人選唐詩」もすべてが一様の構成を持つのではなく、詩人評の内容も様々で、そもそも詩人評を欠くものも少なくない。また懐風藻編纂時点で実際に目にする可能性のあったものも決して多くはない。やや後世のものも援用しつつ推測に頼らざるをえない側面のあることが否めない以上、さらなる文学史的考察が必要であろう。

5 序文に『文選』序文のみならず「唐人選唐詩」の序文との関連を見出した点は評価される。そこに詩人を顕彰するという意図を読みとることができる点で、その関連性は考究すべきものである。ただその序文の意図がそのまま、人物伝と詩を合わせ載せていくという形式に合致するのか、第二部での人物伝の考証とも関連した明確な論証にはなお課題が残る。書名についても通説の「先哲の遺風を懐かしむ藻」という解釈に切り込んで、「風」と「藻」に新たな解釈を提示した意味は大きい。「遺風」に詩人の品格や人徳を偲ぶ意図があり、また「藻」のみでは詩の総集を意味しがたいことは、現存する文献からは高い蓋然性が指摘できる。ただ文献が限られたものであることも事実であり、今後のさらなる探究が必要であることは論を俟たない。

6 本論文の成果として、「編纂意図の解明に向けて」という目標に対する達成は、具体的にどのようなことと言えるのか、また本論文の成果から見通して、懐風藻の編纂意図をどのように想定できるのかが最終的には問われることであった。本論文で定義された「用例未見語」の現れ方や人物伝の付される人物の関歴に鑑みて、また序文に記される大津皇子への不審の残る評語「龍潜王子」の性格からも、懐風藻の編纂が当時の政治社会情勢の中でどのような意義を有したのか、極めて複雑で様相が想定されるのであり、本論文で目指した文学研究からの探究の意義を編纂意図研究の中にどう位置づけるかを常に問い続ける必要がある。

また最後に、論文の構成上やむをえない点もあるが、論述に重複する箇所が散見すること、論旨の提示と展開にやや明晰さを欠くことなど、今後さらなる論点整理と論旨の明確化が求められることも指摘された。

本論文全般を評すれば、懐風藻の詩語に対する評価を大きく転換させる論点を見出すとともに、漢籍受容の裾野を広げる観点を打ち出したこと、そして詩に焦点が当てられがちな現状を脱して散文、特に「人物伝」の構成に着目し、その典型を漢籍に認めることを通して懐風藻の編纂にも及ぶ論点を確立したこと、さらに序文の再検証から書名考証へと論及し、複雑な編纂意図を解明する展望を示したこと、これら本論文の成果は、いずれも上代漢詩文研究にとって貴重な成果であると言える。

現在、懐風藻の研究は数十年振りに全注釈が刊行されるなど、長い停滞の時期を脱して新たな展開を見せつつある。本論文はその現況に鑑みても、懐風藻研究の新機軸を構築することに大きな貢献を成すものである。論点が極めて多岐にわたるため上記のように各論の考証には課題が残るが、本論文は文学研究科の定める博士学位論文の評価基準に十分に達しており、本委員会は本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものと認める。